

Title	京大広報 No. 729
Author(s)	
Citation	京大広報 (2017), 729: 4810-4847
Issue Date	2017-05-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/226622
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

京大 広報

Kyoto University

2017.5
No. 729



※ P4821 参照



※ P4831 参照



※ P4841 参照

目次

[巻頭言]

- 多様な社会が共存する地球社会を目指して－東南アジア地域研究研究所の発足－ 4811
東南アジア地域研究研究所長 河野 泰之

[大学の動き]

- 理事が発令される 4812
- 副理事が発令される 4812
- 理事補が発令される 4812
- 部局長の交替等 4813
- 退職者功労表彰式を開催 4817
- 名誉教授称号授与式を挙行 4817
- 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム／
京都大学金沢講演会を開催 4818
- 京都大学環境報告書2016が第20回環境コミュニケーション
大賞において環境配慮促進法特定事業者賞（第20回環境
コミュニケーション大賞審査委員長賞）を受賞 4820
- 第4回「サステナブルキャンパス構築」国際シンポジ
ウムを開催 4821
- 第6回東南アジアネットワークフォーラムを開催 4821
- 第12回ユニバーシティ・アドミニストレーターズ・ワーク
ショップを開催 4823
- 平成28年度「総長賞表彰式」を挙行 4825
- 「京都大学サイエンスフェスティバル2016－科学の頭脳
戦－」を実施 4827
- 平成29年度学部入試の結果 4828
- 高エネルギー加速器研究機構と連携協力に関する覚書
を締結－J-PARCセンター京都大学分室を開設－ 4831
- 「京都アカデミアフォーラム」in丸の内の開設について発表 4832
- 京都経済同友会と組織連携協定を締結 4833
- 日本電産株式会社の支援による寄附講座「優しい地球
環境を実現する先端電気機器工学」を設立 4834

- 国立研究開発法人産業技術総合研究所と連携研究拠点
「産総研・京大エネルギー化学材料 オープンイノベーション
ラボラトリ」(ChEM-OIL) を設立 4834
- 産総研・京大 エネルギー化学材料オープンイノベーション
ラボラトリ (ChEM-OIL) の開所式を挙行 4835

[寸言]

- 京大ブランド 湯浅 祥弘 4837

[随想]

- 日常の肯定 4838
名誉教授 小野 紀明

[洛書]

- 舞鶴の海から 益田 玲爾 4839

[榮譽]

- 松本 紘 元総長が名誉大英勳章 OBE (Honorary Officer of the
Most Excellent Order of the British Empire) を受章 4840

[話題]

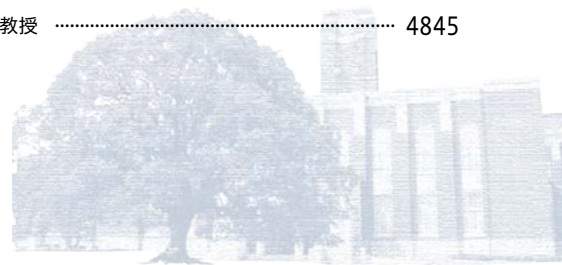
- 宇治おうばくプラザで「第8回たそがれ花見コンサート」を開催 4841
- 宇治キャンパスで「平成29年度新任教職員及び新入
院生等のための安全衛生教育」を開催 4841
- 第12回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催 4842
- 総合生存学館（思修館）学生企画「産学連携バトル！
in Kyoto」を開催 4843
- 高等教育研究開発推進センター 第23回大学教育研究
フォーラムを開催 4843
- 新入生への心肺蘇生・AED 講習会1万人を突破！ 4844

[訃報]

- 樋口 隆昌 名誉教授 4845



京都大学



巻頭言

多様な社会が共存する地球社会を目指してー東南アジア地域研究研究所の発足ー

東南アジア地域研究研究所長 河野 泰之



20世紀後半、わが国は高度経済成長を実現しました。日本製の工業製品が世界を席卷し、私たちは物質的に豊かな生活を享受するようになりました。同じような変化が、少し遅れてですが、私が調査してきたタイの農村でも見られました。1983年に初めてこの村を訪れたとき、村人は少し傾いたトタン屋根の家で水がめに貯めた雨水を飲んで暮らしていました。今では、コンクリート造りの瀟洒な家に住み、バイクで野良へ出かけています。私たちは、科学技術の発達による生産と消費の拡大がけん引した20世紀型の社会発展の恩恵を受け、経済的に豊かになりました。しかし、この発展がさまざまな犠牲と引き換えに実現されたことも間違いありません。それは、自然環境の荒廃や生物的・社会的多様性の喪失、コミュニティの崩壊、家族の弱体化などです。これらが、残念ながら、地球環境問題や経済格差、文化・宗教摩擦、高齢化と社会福祉負担の増大などの現代社会が直面する課題を生み出しています。

これらの課題は相互に複雑に絡み合っています。経済格差を解消するための大規模開発事業は、しばしば新たな環境問題を引き起こすのみならず、ときに民族間の対立を煽ります。21世紀の地球社会をけん引する新たな発展のメカニズムを構築するためには、眼前の問題に焦点をあてた対症療法のように頼るのではなく、20世紀型の社会発展を批判的に検証し、より根本的なところから社会のあり方を検討する必要があります。

これは、言うは易く、行うは難しです。ただ、私たちには強力な見方があります。東南アジアを中心とする世界諸地域の地域社会です。机上の空論ではない、生身の人々の政治、経済、宗教、文化、労働、生活と多様で多彩な自然環境がそこにあります。そこでは、駆け引きや交渉、介入や抑圧、秩序の構築と崩壊が渦巻き、技術や制度がダイナミックに変転する圧倒的な現実があります。この現実には、人類が数千年にわたって構築してきた科学技術体系と同じぐらい価値のある教科書です。この教科書を丹念に読み解くことを出発点として、21世紀の社会発展を構想したいというのが私たちの考えです。

そのためには、東南アジアに限らずより広く世界諸地域を視野に入れて、アカデミズムを超えたネットワークを構築し、ともに東南アジア研究や地域研究の新たな展開を目指すコミュニティを形成する必要があります。そこで、東南アジア研究所と地域研究統合情報センターは平成29年1月1日をもって統合し、東南アジア地域研究研究所として再編しました。東南アジア研究所は1963年の学内措置による設置、1965年の官制化以来、わが国の東南アジア研究を先導し、今では世界トップクラスの東南アジア研究拠点に成長しています。一方、地域研究統合情報センターは、2006年の発足以来、地域研究と情報学を融合させたユニークな研究センターとして成果を上げてきました。今後は、新研究所として所員一同、これまで以上に幅広い分野のみなさまとの連携を強化していく所存です。これまでのみなさまからのご支援に感謝申し上げますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻いただきますよう、お願い申し上げます。

[目次に戻る](#)

大学
の
動き

理事が発令される

4月1日付けで理事が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



総務・労務・人事担当
森田 正信（新任）

[目次に戻る ↗](#)

副理事が発令される

4月1日付けで副理事が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



宇治・遠隔地キャンパス担当
渡邊 隆司（新任）

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

【任期：平成29年4月1日～平成30年9月30日】

総務担当	北村 雅史	法学系（大学院法学研究科）教授（新任）
研究担当	佐治 英郎	学術研究支援室 特任教授（再任）
学生担当	八木 知己	地球工学系（大学院工学研究科）教授（新任）

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き

部局長の交替等

(新任)

教育学研究科長・教育学部長

稲垣恭子 教育学研究科教授(教育社会学)が、高見 茂 教育学研究科長・教育学部長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



法学研究科長・法学部長

洲崎博史 法学研究科教授(商法)が、潮見佳男 法学研究科長・法学部長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



理学研究科長・理学部長

平野丈夫 理学研究科教授(神経生物学)が、森脇 淳 理学研究科長・理学部長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



農学研究科長・農学部長

縄田栄治 農学研究科教授(熱帯農学)が、宮川 恒 農学研究科長・農学部長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



エネルギー科学研究科長

石原慶一 エネルギー科学研究科教授(エネルギー社会工学)が、塩路昌宏 エネルギー科学研究科長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



大学の
動き

生命科学研究科長

垣塚 彰 生命科学研究科教授(病態医化学)が、石川冬木 生命科学研究科長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



総合生存学館長

寶 馨 防災研究所教授(水文学, 水資源工学)が、川井秀一 総合生存学館長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



人文科学研究所長

高木博志 人文科学研究所教授(日本近代史)が、井波陵一 人文科学研究所長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



エネルギー理工学研究所長

岸本泰明 エネルギー科学研究科教授(プラズマ物理・核融合科学)が、水内 亨 エネルギー理工学研究所長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



防災研究所長

中川 一 防災研究所附属流域災害研究センター教授(防災水工学)が、寶 馨 防災研究所長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



基礎物理学研究所長

青木慎也 基礎物理学研究所教授(素粒子理論)が、佐々木 節 基礎物理学研究所長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



大学の
動き

数理解析研究所長

山田道夫 数理解析研究所教授（流体力学・応用数学）が、向井茂 数理解析研究所長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



フィールド科学教育研究センター長

山下 洋 フィールド科学教育研究センター教授（沿岸資源生態学）が、吉岡崇仁 フィールド科学教育研究センター長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



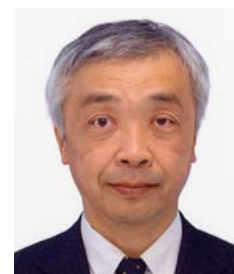
福井謙一記念研究センター長

田中勝久 工学研究科教授（無機固体化学）が、赤木和夫 福井謙一記念研究センター長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



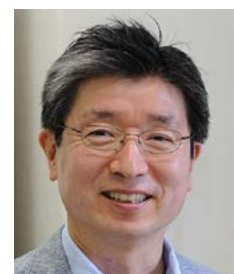
文化財総合研究センター長

吉井秀夫 文学研究科教授（朝鮮考古学）が、吉川真司 文化財総合研究センター長の後任として、4月1日付けで選出されました。任期は平成31年3月31日まで。



研究連携基盤長

小柳義夫 ウイルス・再生医科学研究所教授（ウイルス学）が、大志万直人 研究連携基盤長の後任として、4月1日付けで指名されました。任期は平成31年3月31日まで。



（再任）

情報学研究科長

山本章博 情報学研究科教授（知能情報学）が、4月1日付けで情報学研究科長に再任されました。任期は平成30年3月31日まで。

大学
の
動き**原子炉実験所長**

川端祐司 原子炉実験所教授（中性子物理工学）が、4月1日付けで原子炉実験所長に再任されました。任期は平成31年3月31日まで。

放射線生物研究センター長

高田 穰 放射線生物研究センター教授（DNA損傷シグナル研究分野）が、4月1日付けで放射線生物研究センター長に再任されました。任期は平成31年3月31日まで。

生態学研究センター長

中野伸一 生態学研究センター教授（水域生態学）が、4月1日付けで生態学研究センター長に再任されました。任期は平成31年3月31日まで。

総合博物館長

岩崎奈緒子 総合博物館教授（日本近世史）が、4月1日付けで総合博物館長に再任されました。任期は平成31年3月31日まで。

こころの未来研究センター長

吉川左紀子 こころの未来研究センター教授（認知心理学）が、4月1日付けでこころの未来研究センター長に再任されました。任期は平成31年3月31日まで。

学生総合支援センター長

杉原保史 学生総合支援センター教授（臨床心理学）が、4月1日付けで学生総合支援センター長に再指名されました。任期は平成31年3月31日まで。

白眉センター長

光山正雄 総合生存学館特定教授（微生物感染症学）が、4月1日付けで白眉センター長に再指名されました。任期は平成30年3月31日まで。

環境安全保健機構長

大畠幸一郎 総合生存学館特定教授（有機反応化学）が、4月1日付けで環境安全保健機構長に再指名されました。任期は平成30年3月31日まで。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

退職者功労表彰式を開催

退職者功労表彰式が3月31日(金)に本部棟5階大会議室において開催され、山極壽一 総長、小山房男 総務部長、被表彰者20名が出席しました。

退職者功労表彰式は、退職時において勤続年数が30年以上の教職員および有期雇用教職員に対し、その永年にわたる功労を讃えるため創設されたもので、平成28年度末の被表彰者は34名でした。

表彰式では出席の被表彰者の氏名を紹介した後、総長より、代表者に対して表彰状が授与され、祝辞が述べられました。祝辞では、永年本学の発展のために多大な尽力をいただいたこと、今後も引き続きご尽力いただく方を含め、教職員の協力のもと、WINDOW構想を実現していくことに触れ、感謝の言葉が述べられました。

祝辞の後には、総長との記念撮影を行う等、各々交流を深められ、和やかな雰囲気の中で式が終了しました。



出席された被表彰者との集合写真

(総務部 (人事課))

[目次に戻る](#)

名誉教授称号授与式を挙行

4月5日(水) 午前11時から、百周年時計台記念館において、理事、監事、副学長、副理事、理事補、部局長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行されました。

総長より称号を授与された方は、次の61名です。



氏 名	推 薦 部 局
林 春 男	(防災研究所)
加 藤 和 也	(理学研究科)
眞 貝 洋 一	(ウイルス研究所)
我部山キヨ子	(医学研究科)
高 橋 豊	(情報学研究科)

氏 名	推 薦 部 局
西 山 良 平	(人間・環境学研究科)
安 達 修 二	(農学研究科)
藤 井 紀 子	(原子炉実験所)
大 浦 康 介	(人文科学研究所)
田 中 克 己	(情報学研究科)

大学の
動き

氏 名	推 薦 部 局
高 見 茂	(教育学研究科)
高 橋 大 弐	(工学研究科)
Becker, Carl Bradley	(こころの未来研究センター)
坂 志 朗	(エネルギー科学研究科)
天 野 洋	(農学研究科)
杉 万 俊 夫	(人間・環境学研究科)
平 尾 一 之	(工学研究科)
清 水 展	(東南アジア地域研究研究所)
朝 倉 俊 弘	(工学研究科)
北 川 進	(物質－細胞統合システム拠点)
高 田 光 雄	(工学研究科)
阿 辻 哲 次	(人間・環境学研究科)
東 郷 雄 二	(人間・環境学研究科)
大 串 隆 之	(生態学研究センター)
稲 垣 直 樹	(人間・環境学研究科)
山 室 信 一	(人文科学研究所)
大 石 真	(総合生存学館)
大 谷 雅 夫	(文学研究科)
船 越 満 明	(情報学研究科)
赤 木 和 夫	(工学研究科)
立 花 明 知	(工学研究科)
佐 治 英 郎	(薬学研究科)
堀 和 生	(経済学研究科)
伊 藤 公 雄	(文学研究科)
酒 井 明	(工学研究科)
七 田 芳 則	(理学研究科)

氏 名	推 薦 部 局
澤 本 光 男	(工学研究科)
橋 田 充	(薬学研究科)
上 田 哲 生	(理学研究科)
福 山 淳	(工学研究科)
富 谷 至	(人文科学研究所)
新 山 陽 子	(農学研究科)
前 川 玲 子	(人間・環境学研究科)
井 合 進	(防災研究所)
塩 路 昌 宏	(エネルギー科学研究科)
田 中 耕 治	(教育学研究科)
中 島 正 愛	(防災研究所)
富 田 恭 彦	(人間・環境学研究科)
杉 山 正 明	(文学研究科)
田 門 肇	(工学研究科)
植 田 和 弘	(経済学研究科)
津 田 敏 隆	(生存圏研究所)
間 瀬 肇	(防災研究所)
平 家 俊 男	(医学研究科)
金 子 武 嗣	(医学研究科)
松 岡 久 和	(法学研究科)
中 川 大	(工学研究科)
亀 本 洋	(法学研究科)
佐久間 毅	(法学研究科)
林 行 夫	(東南アジア地域研究研究所)
岡 本 久	(数理解析研究所)

(総務部 (人事課))

[目次に戻る](#)

第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム／ 京都大学金沢講演会を開催

京都大学附置研究所・センターシンポジウム／京都大学金沢講演会「京都からの挑戦 ―地球社会の調和ある共存に向けて」(主催：京都大学，京都大学研究連携基盤，後援：石川県教育委員会，読売新聞社)を3月11日(土)に開催しました。

本シンポジウムは，多岐にわたる基礎研究分野において独自の研究業績を持つ本学の20の研究所・センターが，それらの成果を社会に還元することを目的として，平成18年から毎年1回各主要都市で開催しているものです。第12回となる今回は，「自由風格(フリースタイル)，京大」をテーマに開催しました。また，今回のシンポジウムは，本学がこれまで蓄積してきた知的資源や現在進行中の教育研究活動の成果等を広く社会に還元することを目的として平成9年から

大学の
動き

全国で展開してきた京都大学地域講演会としても位置付けて開催しました。

シンポジウムでは、まず、山極壽一 総長が本学を代表して開会の挨拶を行いました。その後の講演では、伊勢武史 フィールド科学教育研究センター准教授、木庭啓介 生態学研究センター教授、中西嘉宏 東南アジア地域研究研究所准教授、朝長啓造 ウイルス・再生医科学研究所教授、吉岡 洋 こころの未来研究センター教授、宗林由樹 化学研究所教授、井岡邦仁 基礎物理学研究所教授が、それぞれの研究成果を発表しました。講演後には、各講演者が参加者から事前に寄せられた質問に答えるスタイルで、質疑応答が行われ、参加者は講演で紹介された研究内容への理解を深めました。



開会挨拶する山極総長

講演者の伊勢准教授

講演者の木庭教授

講演者の中西准教授



講演者の朝長教授

講演者の吉岡教授

講演者の宗林教授

講演者の井岡教授

また、パネルディスカッションでは、吉川左紀子 こころの未来研究センター長の司会により、山極総長、大志万直人 研究連携基盤長ならびに研究連携基盤の多彩な学術領域をベースにしたボトムアップ的な新学術領域を創成するために設置された4つの未踏科学研究ユニットのユニット長が、「地上にもともと道はない（魯迅）—未踏科学研究ユニットが目指すもの」と題して意見交換を行いました。

最後に、湊 長博 理事・副学長が総括および閉会の挨拶を行い、シンポジウムは終了となりました。当日は、公募による参加者のほか、石川県内の高校生団体346名など合わせて673名の参加があり、熱心に耳を傾けました。



パネルディスカッションの様子



総括および閉会の挨拶する湊理事・副学長

(総務部（渉外課）)

[目次に戻る](#)

大学の
動き

京都大学環境報告書2016が第20回環境コミュニケーション大賞において環境配慮促進法特定事業者賞（第20回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞）を受賞

「京都大学環境報告書2016」(2016(平成28)年9月発行・公開)が、第20回環境コミュニケーション大賞の環境報告書部門において、「環境配慮促進法特定事業者賞（第20回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞）」を受賞しました。環境コミュニケーション大賞は、優れた環境報告書等を表彰することで、事業者を取り巻く関係者との環境コミュニケーションを促進し、もって環境への

取組が一層活性化することを目的に、環境省および一般財団法人地球・人間環境フォーラムが主催する制度です。

今回の環境コミュニケーション大賞は、平成28年10月4日(火)～11月8日(火)にかけて募集が行われ、環境報告書部門217点、環境活動レポート部門121点、あわせて338点の応募がありました。

本年度は、環境コミュニケーション大賞制定第20回目を記念し、受賞のPR活用として受賞ロゴマーク(金・銀・銅)が新設されました。これは、表彰の対象となった団体の活動の広報や宣伝等を目的とする場合において使用できるマークです。本学には、「優秀賞」(銀)のロゴが与えられました。

表彰式は、2月22日(水)に「グランドプリンスホテル新高輪」(東京・品川)にて開催され、末廣一成 施設部環境安全保健課長他施設部職員2名が出席しました。



環境報告書 2016



受賞ロゴマーク(銀)



表彰状が第20回環境コミュニケーション大賞 八木審査委員長から末廣施設部環境安全保健課長に授与される様子



賞状

(施設部(環境安全保健課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

第4回「サステイナブルキャンパス構築」国際シンポジウムを開催

2月27日(月)に、第4回「サステイナブルキャンパス構築」国際シンポジウムが開催されました。今回のテーマは、昨今のサステイナブルキャンパスに向けた活動の幅の広がりとその核となるサステナビリティへの思いを扇に見立て、「持続可能な環境配慮型大学構築のための『かなめ』と『ひろがり』—古今東西の知恵の扇を展げる—」。国内外の講演者・研究者・企業・学生や施設整備に携わる職員を含め、総勢約140名が参加しました。最先端技術を駆使したキャン



パネルディスカッションの様子



学生プレゼンテーションの様子

パスの「スマート」化を目指した取組や、地域特有の気候風土に合う昔ながらの伝統的な文化を応用した「ヴァナキュラー」な取組が、基調講演やパネルディスカッションで紹介されました。そしてそれをいかに融合させ、より良い取組に発展させていくかということについて、基調講演者と4人のパネリスト、そしてコーディネーターの間で活発な議論が行われました。会場からも多数の質問が寄せられ、会場全体でこれからのサステナビリティを考え合う場となりました。さらに今回から新しく、学生プレゼンテーションの時間が設けられ、10組の発表が行われました。その後のポスターセッションでは、そこで興味を持った参加者と発表者との意見交換が行われ、大いに盛り上がりを見せました。

(施設部(環境安全保健課))

[目次に戻る](#)

第6回東南アジアネットワークフォーラムを開催

インドネシア・マラン市にある国立ブラウィジャヤ大学(Universitas Brawijaya)において、同大学およびインドネシア在住の京都大学元留学生の同窓会組織であるインドネシア京都大学同窓会(HAKU)を中心として、京都大学ASEAN拠点、東南アジア地域研究研究所、工学研究科が共催し、第6回東南アジアネットワークフォーラムを3月6日(月)、7日(火)に開催しました。

同フォーラムは、元留学生が現地で作る同窓生組織と連携して、本学の最新の研究成果を現地社会に還元することを最大の目的に、現地社会がいま最も関心を寄せる学術テーマをとりあげてきました。インドネシアでは、2007(平成19)年度から2014(平成26)年度までHAKUが毎年開催してきた京都大学東南アジアフォーラム(合計8回)、2015(平成27)年度からその規模を拡大した東南アジアネットワークフォーラムを合わせると、今回で10回目の開催

大学の
動き

となります。

今回のフォーラムは、ブラウイジャヤ大学主催の「不確定時代の計画に関する第3回国際会議」と一部共同開催し、急速に都市化を遂げつつあるインドネシアにおいて喫緊の課題である都市・空間計画のあり方をテーマに行われ、22名の京都大学元留学生に加えて、6名の基調講演のセッションでは、同時開催された国際会議の参加者および聴衆も含め、合計305名の参加がありました。



フォーラムでの集合写真

本フォーラムは6日、ブラウイジャヤ大学長、同大学工学部長、工学部都市・地域計画学科長の挨拶に始まり、同日、小林潔司 工学研究科教授、ハンス・ウェストルト・スウェーデン 王立工科大学教授が基調講演を行いました。7日は、エミル・ダルダック トレンガレク県知事、岡本正明 東南アジア地域研究研究所教授、スルヨノ ブラウイジャヤ大学教授が基調講演を行い、小田真玄 ASEAN拠点職員が本学の紹介を行いました。参加者からは多くの質問があり、休憩時間にも熱心に議論が交わされました。6日のフォーラム終了後には、ブラウイジャヤ大学長の主催でHAKUとの交流会が行われ、有意義な意見交換の場となりました。



基調講演をする小林工学研究科教授



基調講演をするダルダック県知事



HAKU との記念撮影

6日のフォーラム終了後には、ブラウイジャヤ大学長の主催でHAKUとの交流会が行われ、有意義な意見交換の場となりました。

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

第12回ユニバーシティ・アドミニストレーターズ・ワークショップを開催

「第12回ユニバーシティ・アドミニストレーターズ・ワークショップ(UAW)」を、2月8日(水)～9日(木)に百周年時計台記念館にて開催しました。

今年で12年目を迎える本ワークショップは、国際交流基盤の充実を図ることを目的に、本学と交流のある環太平洋地域の交流協定校の他、国際大学連合加盟校、スーパーグローバル大学創生支援採択校等から国際交流実務担当者らが集い、国際交流に関する共通の課題に対し、報告・討論を通じて、相互理解を深める貴重な機会となっています。

今年は統一テーマとして「持続可能な学内外リレーションシップの強化」を掲げ、海外から28大学、国内から5大学、本学関係者を含め100名の参加がありました。

ワークショップは三橋 紫 国際戦略本部副本部長の司会・進行により始まり、稲葉カヨ 理事・副学長による歓迎の挨拶に続いて、3つのサブテーマによるポスターセッションを、Beardsley Karen 米国UCDavis校国際交流プログラム・特別プロジェクト部門長、三橋副本部長、および今羽右左デヴィッド甫 企画・情報部広報課国際広報室長の3名のファシリテーターのもとに開催しました。

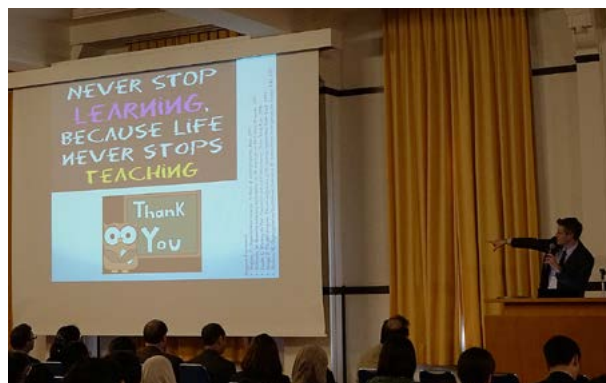
その後、フェルナンド・パラシオ 国際戦略本部特定講師による特別講演「Institutional Learning: Keeping Records and Sharing Lessons to Improve Accountability and Performance」、グループワークと発表、優秀ポスター投票を行い、活発な交流や討論が繰り広げられました。



三橋国際戦略本部副本部長による司会進行



稲葉理事・副学長による開会の挨拶



フェルナンド特定講師による特別講演



参加者によるグループワークの様子



グループワーク発表の様子

大学の
動き

なお、第12回UAWの統一テーマとサブテーマは以下のとおりです。

統一テーマ：Building Sustainable Relationships: Developing and
Maintaining Effective Internal and External Communication
(持続可能な学内外リレーションシップの強化)

サブテーマA) Enhancing Global Presence through International PR
(大学のプレゼンス向上のための海外広報活動)

サブテーマB) The Role of Administrative Staff in Assisting Students with
Difficulties
(困難を抱える学生に対して大学職員が果たすことの出来る役割)

サブテーマC) Effective Internal Communication among University Staff Working
on International Activities
(国際活動を行う上での、大学職員間の効果的な学内コミュニケーション)

参加機関一覧等

	国名	大学名（和名）	優秀ポスター投票結果
1	アメリカ	カリフォルニア大学デービス校	
2	インドネシア	ボゴール農業大学	
3	インドネシア	インドネシア科学院（LIPI）	
4	インドネシア	バンドン工科大学	
5	カナダ	ブリティッシュコロンビア大学	
6	タイ	チェンマイ大学	
7	タイ	チュラロンコン大学	
8	タイ	カセサート大学	
9	タイ	マヒドン大学	
10	タイ	タマサート大学	
11	チリ	チリ大学	
12	フィリピン	フィリピン大学	Gold Poster Prize Awarded
13	ブルネイ	ブルネイ ダルサラーム大学	
14	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	
15	マレーシア	マレーシア工科大学	
16	マレーシア	マラヤ大学	
17	韓国	建国大学校	Bronze Poster Prize Awarded
18	韓国	韓国科学技術院（KAIST）	Silver Poster Prize Awarded
19	韓国	高麗大学校	Bronze Poster Prize Awarded
20	韓国	浦項工科大学校（POSTECH）	
21	韓国	延世大学校	Silver Poster Prize Awarded
22	中国	復旦大学	
23	中国	香港科技大学	
24	中国	南京大学	
25	中国	中国科学技術大学	

大学の
動き

	国名	大学名（和名）	優秀ポスター投票結果
26	中国	武漢大学	
27	台湾	国立台湾大学	
28	台湾	国立清華大学（新竹）	
29	日本	東京大学	
30	日本	名古屋大学	
31	日本	九州大学	
32	日本	新潟大学	
33	日本	京都大学	

（企画・情報部（国際交流課））

[目次に戻る](#)

平成 28 年度「総長賞表彰式」を挙行

学業・課外活動・社会貢献活動等において顕著な活躍をし、本学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の平成 28 年度表彰式を 3 月 21 日（火）に挙行了しました。

今回は、全 19 件の推薦の中から選考の結果、学業から 5 名と 1 団体、課外活動から 1 名の計 7 件の受賞者が決定し、表彰されました。

表彰式では、初めに学生表彰選考委員会委員長の川添信介 理事・副学長が選考結果を報告されました。

引き続き、山極壽一 総長から表彰状・記念品等授与が行われ、その後講評等を行いました。

表彰式後の記念撮影ののち、各受賞者からプレゼンテーションが披露され、山極総長、川添理事・副学長からも質問が出るなど盛況のうちに終了しました。

平成 28 年度 京都大学総長賞表彰者

被推薦者・団体名	推薦 対象 分野	表彰理由
工学研究科材料化学専攻 DC 1 回生 オオギ アキト 大木 暁登	学業	フェノールの水素化分解反応を独自に着想して開発し、Chemistry Letter 誌に論文発表を行った。この研究が注目を浴び、新化学技術推進協会（JACI）が選定する GSC Student Travel Grant Award を受賞した。そのため、香港で行われた国際学会に日本の大学院生の代表として参加・発表を行った。
物理科学課題研究 P4 （代表）理学部理学科 4 回生 オカモト シンタロウ 岡本 慎太郎	学業	ビッグバン元素合成における「宇宙リチウム問題」に取り組み、その成果が国際的に高い評価を受け、約 300 名参加の国際会議 “Nuclei in the Cosmos” において平成 27 年度在籍の学生が口頭発表を行ったほか、米国物理学会刊行の学術誌 Physical Review Letters に掲載されることとなった。

大学の
動き

被推薦者・団体名	推薦 対象 分野	表彰理由
教育学研究科教育科学専攻 DC 3 回生 カヅムラ ショウゴ 梶村 昇吾	学業	注意散漫を導く思考の発生に関わる神経基盤およびその制御可能性についての研究を行い、多くの顕著な業績をあげ、その成果は、脳機能研究の一流国際誌である Neuroimage 誌を始めとする 9 本の査読論文誌に採択され、5 度にわたって学会発表賞を受賞した。
医学部人間健康科学科 4 回生 イタヤ タカヒロ 板谷 崇央	学業	学業成績が極めて優秀であり、学部学生でありながらも国立がんセンター研究班や内閣府革新的研究開発プログラム (ImPACT) の一員として迎えられている。さらに、2013 年に開催された合成生物学の国際大会である iGEM (the International Genetically Engineered Machine competition) では、アジア大会銀賞を受賞した。
文学研究科西南アジア史専修 MC 2 回生 ハヤカワ ヒサシ 早川 尚志	学業	歴史文献を用いた宇宙科学研究という文理融合型の新しいプロジェクトを立ち上げ、発表した研究は、総研大学融合シンポジウムの最優秀賞、地球電磁気学会の学生優秀賞に採択されたほか、米国 Scientific American を含め国内外の各種メディア 4 紙にて報道された。
理学研究科 物理学・宇宙物理学専攻 MC 2 回生 キムラ マリコ 木邑 真理子	学業	ブラックホール X 線連星 V404Cyg の爆発現象に際し、26 カ国の 35 基に及ぶ望遠鏡での可視光多色連続測光観測を指揮し、データ解析をおこなった。この成果は科学雑誌 Nature に発表し、国内外の新聞やニュースなどで多数 (国内 11 件、海外 87 件) 報道された。
工学研究科航空宇宙工学専攻 MC 2 回生 マツシタ ムツキ 松下 睦生	課外 活動	2016 年に開催された第 42 回全日本オリエンテーリング大会において、本学の学生として初めて優勝し、その結果を受け、京都府体育協会優秀選手賞を受賞した。さらに世界大会の日本代表にも選出された。



受賞者および関係者

(教育推進・学生支援部 (厚生課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

「京都大学サイエンスフェスティバル 2016 – 科学の頭脳戦 –」を実施

本学は、大阪府・滋賀県・兵庫県・京都府・京都市・和歌山県・三重県・東京都・石川県・徳島県・徳島市・福井県教育委員会および奈良県との間で締結している高大接続・高大連携に関する協定に基づき、「京都大学サイエンスフェスティバル 2016 – 科学の頭脳戦 –」を3月18日(土)に百周年記念ホールで開催しました。本企画は、各教育委員会が推薦した代表校による科学の研究発表大会であり、それぞれの高等学校で深めてきた課題探究活動の成果を広く発表することによって、視野を広げる一助とすることを目的としています。発表する生徒以外にも約250名が聴講しました。

研究発表は、発表要旨のまとめ方、課題設定の独創性、研究の発展性、全体の完成度、発表姿勢や声量の5つのポイントで評価し、優秀な発表を行った高等学校には、総長賞および副学長賞を贈呈しました。

当日は、山極壽一 総長による開会挨拶ならびに基調講演を皮切りに、各校における日頃の真摯な取組みの成果について、工夫ある発表が繰り広げられました。各校の発表後には、本学理科学研究科および農学研究科の各教員が講評を行い、質問や激励などの指導助言がありました。さらに、会場の参加者との質疑応答では、多くの質問や意見が飛び交いました。生徒の皆さんは、それぞれの講評や質問などにも熱心に対応し、緊張の中にも課題探究活動のさらなる進展を強く決意する姿が伺えました。

表彰式では、山極総長および北野正雄 理事・副学長より全体講評を行った後、総長賞および副学長賞として、賞状ならびに記念のトロフィー・楯を贈呈しました。いずれの高等学校も、非常にレベルの高い探究活動を行っており、プレゼンテーションの工夫や発表に対する姿勢も素晴らしく、参加した本学教員からも感心する声が多く寄せられました。高等学校から大学への円滑な学びの移行を促進させるとともに、生徒の皆さんには、他の都府県市の高校生の前で発表したこの機会を糧として、さらなる探究活動に励んでいくことが望まれます。

なお、各校の研究発表テーマは以下の一覧のとおりです。

受賞校および参加校

■総長賞

和歌山県立田辺高等学校 「和歌山県鳥の巣半島で野生化しているアフリカツメガエル」



山極総長による全体講評

総長賞を受賞した和歌山県立田辺高等学校の研究発表の様子

大学の
動き

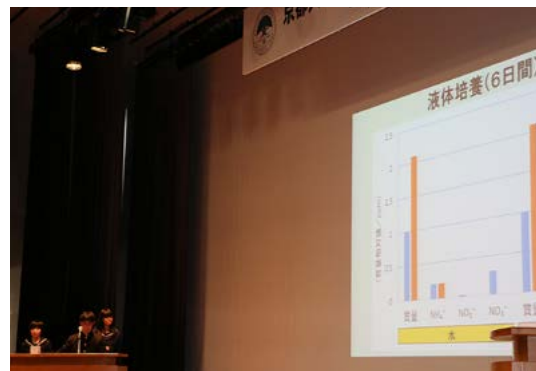
■副学長賞

奈良女子大学附属中等教育学校 「植物の葉序の規則性」

福井県立藤島高等学校 「シアノバクテリアの研究～シアノバクテリアが地球を救う!?～」



副学長賞を受賞した奈良女子大学附属中等教育学校の研究発表の様子



副学長賞を受賞した福井県立藤島高等学校の研究発表の様子

■各校の研究発表テーマ一覧

大阪府立豊中高等学校 「ドミノの並べ方と倒れる速さの研究」

滋賀県立膳所高等学校 「ライデンフロスト現象発生下における2水滴の衝突」

兵庫県立豊岡高等学校 「兵庫県香美町御崎地区に自生する『平家かぶら』の形態的特徴の調査および分子系統解析」

京都府立桃山高等学校 「糖アルコールの相転移研究－グリセリンの不凍性の謎にせまる－」

京都市立堀川高等学校 「木星の衛星エウロパに生命は存在しうるか」

三重県立津高等学校 「月の明るさ～満月は半月の何倍～」

東京都立多摩科学技術高等学校 「田んぼからのエネルギーの贈り物～添加物を用いたもみながら熱分解の効率化～」

石川県立金沢泉丘高等学校 「野菜の鮮度測定方法の開発及び鮮度保持方法の研究」

徳島県立城南高等学校 「防波堤の形状による津波の高さの減少効果についての研究」

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る](#)

平成 29 年度学部入試の結果

入試区分・学部・学科別の受験者数、合格者数、入学者数は次表のとおりです。

平成 29 年度一般入試（前期日程）等の結果

（平成 29 年 4 月 1 日現在）

学部・学科			(A) 募集 人員 人	受入 予定数 (目安) 人	(B) 志願 者数 人	倍率 (B/A) 倍	第1段階 選抜合 格者数 人	(C) 受験 者数 人	倍率 (C/A) 倍	欠席 者数 人	欠席 率 %	合格 者数 人	辞退 者数 人	追加 合格者 数 人	入学 者数 人
総合人間 学部	前期	文系	117		470	4.0	410	403	3.4	7	1.7	121	1	0	120
		理系	63		255	4.0	221	218	3.5	3	1.4	65	0	0	65
			54		215	4.0	189	185	3.4	4	2.1	56	1	0	55
文学部	前期		210		685	3.3	684	664	3.2	20	2.9	212	0	0	212
教育学部	前期	文系	54		240	4.4	193	189	3.5	4	2.1	55	0	0	55
		理系	44		192	4.4	154	150	3.4	4	2.6	44	0	0	44
			10		48	4.8	39	39	3.9	0	0.0	11	0	0	11
法学部	前期		300		779	2.6	779	769	2.6	10	1.3	311	0	0	311
経済学部	前期	文系	211		669	3.2	636	616	2.9	20	3.1	221	0	0	221
		理系	183		512	2.8	512	494	2.7	18	3.5	193	0	0	193
			28		157	5.6	124	122	4.4	2	1.6	28	0	0	28
理学部	前期		306		794	2.6	783	775	2.5	8	1.0	311	1	0	310
医学部	前期		180		638	3.5	587	569	3.2	18	3.1	192	3	0	189
医学科		前期	105		331	3.2	320	319	3.0	1	0.3	111	0	0	111
人間健康科学科		前期	75		307	4.1	267	250	3.3	17	6.4	81	3	0	78
薬学部	前期		78		221	2.8	221	214	2.7	7	3.2	84	0	0	84
薬科学科		前期	48		115	2.4	115	112	2.3	3	2.6	53	0	0	53
薬学科		前期	30		106	3.5	106	102	3.4	4	3.8	31	0	0	31
工学部	前期		947		2,685	2.8	2,683	2,632	2.8	51	1.9	946	1	0	945
地球工学科		前期		182	317	—	317	—	—	—	—	176	1	0	175
建築学科		前期		80	357	—	356	—	—	—	—	81	0	0	81
物理工学科		前期		235	756	—	756	—	—	—	—	236	0	0	236
電気電子工学科		前期		127	386	—	386	—	—	—	—	128	0	0	128
情報学科		前期		90	388	—	387	—	—	—	—	91	0	0	91
工業化学科		前期		233	481	—	481	—	—	—	—	234	0	0	234
農学部	前期		284		694	2.4	694	674	2.4	20	2.9	290	0	0	290
資源生物科学科		前期		91	—	—	—	—	—	—	—	93	0	0	93
応用生命科学科		前期		44	—	—	—	—	—	—	—	44	0	0	44
地域環境工学科		前期		34	—	—	—	—	—	—	—	35	0	0	35
食料・環境経済学科		前期		30	—	—	—	—	—	—	—	32	0	0	32
森林科学科		前期		55	—	—	—	—	—	—	—	55	0	0	55
食品生物科学科		前期		30	—	—	—	—	—	—	—	31	0	0	31
計			2,687		7,875	2.9	7,670	7,505	2.8	165	2.2	2,743	6	0	2,737

※工学部の学科別志願者数および第 1 段階選抜合格者数は、第 1 志望学科の数を示す。

※工学部地球工学科の入学者は、外国人留学生を対象とした国際コースの入学者 8 人を除く。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	(A) 募集 人員 人以内	(B) 志願 者数 人	倍率 (B/A) 倍	第1段階 選抜合 格者数 人	(C) 受験 者数 人	倍率 (C/A) 倍	欠席 者数 人	欠席 率 %	合格 者数 人	辞退 者数 人	入学 者数 人
法 学 部	10	12	1.2		9	0.9	3	25.0	5	0	5
経済学部	10	13	1.3	11	10	1.0	1	9.1	7	1	6

※法学部では第一次選考は実施しない。

※受験者数・欠席率は最終教科時における数字である。

大学の
動き

平成 29 年度特色入試の結果

(平成 29 年 4 月 1 日現在)

学部・学科・コース			募集 人員	志願 者数	倍率	第1選 考合 格者 数	第2選 考受 験者 数	欠 席 者 数	第2選 考合 格者 数	最終 選考 合格者 数	辞退 者数	入 学 者 数
総合人間学部			5	16	3.2	16	16	0	—	3	0	3
文学部			10	42	4.2	—	41	1	—	11	0	11
教育学部			6	21	3.5	11	11	0	7	6	0	6
法学部（後期日程）			20	487	24.4	340	91	249	—	23	0	23
経済学部			25	64	2.6	64	64	0	27	19	0	19
理学部			5	47	9.4	47	47	0	5	5	0	5
医学部	医学科		5	5	1	5	5	0	—	2	0	2
	人間健康 科学科	先端看護科学 コース	20	33	1.7	32	32	0	—	15	0	15
		先端リハビリテー ション科学コース （理学療法学講座）	5	16	3.2	16	16	0	—	5	0	5
		先端リハビリテー ション科学コース （作業療法学講座）	5	7	1.4	7	7	0	—	5	0	5
薬学部	薬科学科		3	3	1	3	3	0	—	2	0	2
工学部	地球工学科		3	13	4.3	—	—	—	—	3	0	3
	電気電子工学科		5	11	2.2	—	—	—	—	3	0	3
	情報学科		3	4	1.3	1	1	0	1	0	0	0
	工業化学科		7	7	1	5	—	—	—	2	0	2
農学部	資源生物科学科		3	25	8.3	12	12	0	4	3	0	3
	応用生命科学科		3	9	3	6	6	0	4	3	0	3
	地域環境工学科		3	11	3.7	9	9	0	3	3	0	3
	食料・環境経済学科		3	10	3.3	10	9	1	3	2	0	2
	森林科学科		3	13	4.3	12	12	0	2	2	0	2
	食品生物科学科		3	17	5.7	10	10	0	3	3	0	3
計			145	861	5.9	606	392	251	59	120	0	120

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

高エネルギー加速器研究機構と連携協力に関する覚書を締結 －J-PARC センター 京都大学分室を開設－



(前列左から) 湊理事・副学長, 岡田理事による覚書の締結



概要説明をする齊藤センター長

本学と高エネルギー加速器研究機構 (KEK) は、平成 22 年度に締結した連携・協力の推進に関する基本協定に基づき、両機関のさらに緊密な研究協力関係を構築するため覚書を取り交わし、KEK 東海 1 号館 (茨城県那珂郡東海村) に J-PARC センター 京都大学分室を設置しました。

覚書締結式は、KEK と日本原子力研究開発機構 (JAEA) が共同運営する J-PARC センター (大強度陽子加速器施設) で 2 月 22 日 (水) に執り行われ、湊 長博 理事・副学長と岡田安弘 KEK 理事が覚書に署名しました。

岡田理事より、地球が誕生して、どのように物質や生命が生まれ、多様性がどのように進んできたのかを探究し物質の起源に迫り、大強度ビームで新しい価値観を求める J-PARC センターの独創的な取り組みについて紹介があった後、京都大学分室の設置を記念して、齊藤直人 J-PARC センター長から「京都大学 J-PARC 分室の設置にあたって一大強度ビームで世界を繋ぐ!」とのタイトルで概要説明があり、J-PARC と本学が協力することで、基礎科学から産業応用まで研究対象がさらに広がり、人材育成が活発となる期待が述べられました。また、「J-PARC における京都大学の核心的貢献」の代表例として、中家 剛 理学研究科教授によるニュートリノ実験施設での T2K ニュートリノ実験、KOTO k 中間子稀崩壊実験、永江知文 理学研究科教授によるハドロン実験施設でのハイパー核実験、ハドロン実験など、J-PARC での本学教員が中心的に活動する研究の紹介があり、本学のホームグラウンドとして共同で新しい取り組みを生み出していくためにも、分室の設置は有益であり、おおいに歓迎である旨が述べられました。

締結式の後、J-PARC の代表的な施設であるハドロン実験施設、物質・生命科学実験施設



ハドロン実験施設での研究機器の説明



金谷ディビジョン長による機器構成の説明

大学の
動き



東京大学のスーパーカミオカンデにつながるニュー トリノ施設の見学
湊 理事・副学長による看板掲揚

(MLF), ニュートリノの視察が行われ, MLFでは金谷利治 MLFディビジョン長(本学化学研究所元教授)から, 本学と共同で設置した装置による革新的な研究成果が披露されました。

その後, 分室が設置されるKEK東海1号館に移り, 湊理事・副学長による京都大学分室の看板掲揚が行われました。

(研究推進部(研究推進課))

[目次に戻る](#)

「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内の開設について発表

新丸の内ビルディング10階にある京都大学の東京オフィスの隣接スペースに, 「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内を平成29年7月に開設し, 京都府下の多数の大学と京都大学の東京における活動拠点とすることを, 3月24日(金)に発表しました。

本学では, 『「京都アカデミアフォーラム」を作り「大学の街一京都」を東京で発信する新たな試みを行う』, という趣旨にご賛同いただいた京都府下の大学に共同で入居していただき, 京都の大学が連携して東京で情報発信を行っていくという初めての試みに取り組んでいきます。

京都は歴史・文化の集積地ですが, その空間は, 今も変化し続けています。産業界では戦後ベンチャーから出発し, 特異な得意分野を持ち, グローバルに成長した企業を多く生み出し, アカデミズムでは, 自然科学から人文科学, 芸術まで多様な大学が集積しています。数々の権威ある賞の受賞といった先に進む業績だけでなく, 多様なかたちで様々な分野に広がり続けています。「京都アカデミアフォーラム」の取組みを通じて, これらの京都のアカデミズムの意義を示す活動を推進していきます。

< 参加大学 >

京都外国語大学, 京都光華女子大学, 京都工芸繊維大学, 京都市立芸術大学, 京都精華大学, 京都橘大学, 京都美術工芸大学, 同志社女子大学, 京都大学

< 入居企業等 >

京都大学イノベーションキャピタル株式会社, 関西TLO株式会社

「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内 概要

名 称: 「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内
所在地: 東京都千代田区丸の内1-5-1
新丸の内ビルディング10階
施 設: 会議室(4室), オフィス(3室), ラウンジ等
開設日: 2017年(平成29年)7月3日【予定】
目 的: 京都府下の大学等が連携し, 「情報発信の場」として活用することにより, 京都の科学技術, 文化, 芸術等を通じた「大学の街一京都」のプレゼンス向上を図る。

○参加大学(9大学) ※2017年3月24日現在
京都外国語大学, 京都光華女子大学, 京都工芸繊維大学, 京都市立芸術大学, 京都精華大学, 京都橘大学, 京都美術工芸大学, 同志社女子大学, 京都大学

○入居企業等(2社)
京都大学イノベーションキャピタル株式会社, 関西TLO株式会社

参加機関は随時拡大をしていくとともに, 京都府・京都市等の自治体と連携を加進する。

大学の
動き

< 活動内容（予定） >

①京都の文化・芸術・科学の情報発信

◆発表会・講座，交流会，会員制ネットワーク形成などを通じ，各パートナー大学の持ち味を活かしながら，京都の文化・芸術・科学を情報発信。

◆大学間で連携したイベント等（「京都アカデミアウィーク（仮称）」）の企画・実行。

②産連活動

◆新技術説明会，共同研究相談会，各種研修・講座，教員・研究員と企業・経済団体との交流等。

◆技術移転や大学発ベンチャー投資の活動拠点，プレス発表，ベンチャーキャピタル投資説明会等。

【プレスリリース資料】

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyu-suishin/sankangaku-renkei/news/2016/documents/170324_1/02.pdf

（研究推進部（産官学連携課））

[目次に戻る ↗](#)

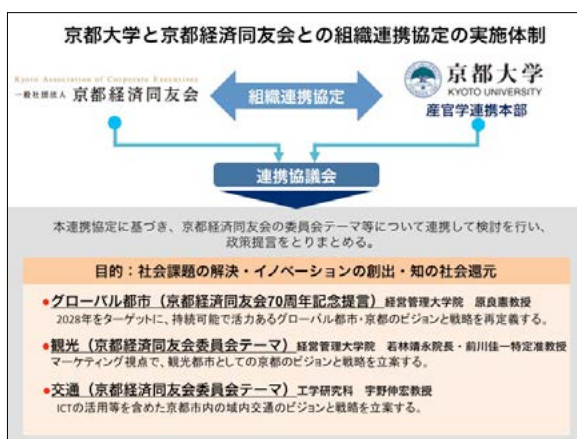
京都経済同友会と組織連携協定を締結

本学と一般社団法人京都経済同友会は，組織連携協定を締結（3月29日（水））し，京都が持続可能で活力あるグローバル社会となることを目指し，複数のテーマで連携をしていきます。

経営管理大学院や工学研究科の教員が本活動に関与し，今後の京都のあるべき姿や受益者視点での観光，都市交通体系の在り方についての調査・研究において連携を図ります。両組織の「知」や「ネットワーク」等を効果的に活用することで，京都の魅力をもさらに高めるための政策提言につなげ，京都にある大学として広く積極的な知の社会還元を目指します。



（左）鈴木京都経済同友会代表幹事（右）山極総長
於：京都大学国際科学イノベーション棟



（研究推進部（産官学連携課））

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

日本電産株式会社の支援による寄附講座「優しい地球環境を実現する先端電気機器工学」を設立

先端的電気機器研究開発を通して将来の地球環境の持続的成長を支えるとともに、当該分野に精通した若手人材を育成することを目的として、4月1日（土）に、日本電産の支援による寄附講座「優しい地球環境を実現する先端電気機器工学」を工学研究科電気工学専攻に設立しました。

設立に伴って、4月7日（金）に、百周年時計台記念館において記者発表を行い、山極壽一 総長および永守重信 日本電産株式会社代表取締役会長 兼 社長から本寄附講座に対する期待などを含めた挨拶のあと、本講座の特定教授に就任した中村武恒 工学研究科特定教授より概要説明がありました。

本寄附講座では、持続可能な優しい地球環境を実現するための革新的な電気機器に関する技術研究開発に、基礎的かつ学際融合的見地から広範な学術分野の知見を取り入れつつ取り組みます。これらに関連する分野は多岐に亘っており、基礎科学から産業応用までの幅広い分野での大きな寄与が期待でき、また、これらを通じて、大学院生の研究指導や次代を担う若手研究者の育成という点においても、大きな効果が期待できます。

【プレスリリース資料】

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyu-suishin/kenkyu-suishin/news/2017/documents/170407_1/01.pdf

（研究推進部（産官学連携課））

[目次に戻る ↗](#)



（左）永守日本電産株式会社代表取締役会長 兼 社長（右）山極総長（於：百周年時計台記念館）



中村武恒特定教授

国立研究開発法人産業技術総合研究所と連携研究拠点「産総研・京大 エネルギー化学材料 オープンイノベーションラボラトリ」(ChEM-OIL) を設立

京都大学と産業技術総合研究所は、京都大学の最先端材料基礎研究と産業技術総合研究所の蓄電・蓄エネルギーデバイスに関する目的基礎研究・応用研究を融合し、両機関が双方の強みを活かしてエネルギー化学材料に関する研究を行う連携研究拠点「産総研・京大 エネルギー化学材料 オープンイノベーションラボラトリ」(ChEM-OIL) を高等研究院に設置（平成29年4月1日）しました。本連携研究拠点において、世界をリードする研究とイノベーションの実現を推進し、また、同時に、若手研究者の育成を行います。

大学の
動き

燃料電池や蓄電池のような、化学エネルギーと電気エネルギーの常温・常圧での相互変換やエネルギー貯蔵が高効率に進行できる電気化学デバイスは、社会の低炭素化に大きく貢献することが期待されています。デバイス動作の基本となる電気化学反応は気相・固相・液相の三相界面で電子の流れとイオンの流れが高速で出会い、反応することが求められていますが、従来、その界面構造は経験と勘に基づく試行錯誤で最適化が行われており、理論的に目指すべき構造が具現化されているわけではありません。しかしながら近年、エネルギーデバイスに対する要求性能が急速に高まり、理論限界に迫る性能を出すことが求められています。このためには、電子伝導性・イオン伝導性、触媒活性、耐食性などを高度に確保しながら、機能界面としての原子数個から数十個スケールの立体空間を理想に近いかたちで設計・構築することが不可欠となります。

産業技術総合研究所は、電気化学デバイスのベースとなる材料合成技術、デバイス化に不可欠な伝導性、光・電気化学活性などの機能化および複合化技術、そしてこれらの多様な機能性複合材料を蓄電池や燃料電池などのエネルギー変換・貯蔵デバイス化する技術を有しており、多くの企業への橋渡しの実績があります。

京都大学は多孔性配位高分子(MOF/PCP)、電解質、金属ナノ粒子触媒材料をはじめとする有機、無機、高分子などの材料開発や、放射光による先端材料解析などの研究分野で世界をリードする先端研究を推進しており、文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」で設置され、分野横断的な研究を牽引する物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)など、日本の化学、材料科学の基礎研究のトップが集結しています。

今般、産業技術総合研究所と京都大学は新たな産業技術総合研究所の拠点(ChEM-OIL)を京都大学吉田キャンパスに設置し、産業技術総合研究所と京都大学が有するデバイス化応用技術と材料基礎科学技術を融合します。京都大学の先端材料シーズ(多孔性配位高分子(MOF/PCP)、電解質、金属ナノ粒子触媒など)を、産業技術総合研究所の機能界面構築や電気化学デバイス化技術と直結させ、従来にないエネルギー変換、エネルギー貯蔵技術の開発を目指します。産学官ネットワークの構築により、民間企業の参画による「橋渡し」につながる目的基礎研究を強化し、革新的エネルギー化学材料技術の実用化のために必要な基盤技術・材料、電解質材料、触媒材料・電極設計及びデバイス化技術に関する基礎・応用研究を実施します。

【プレスリリース資料】

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyu-suishin/sankangaku-renkei/news/2017/documents/170401_1/01.pdf

(研究推進部(産官学連携課))

[目次に戻る ↗](#)

産総研・京大 エネルギー化学材料オープンイノベーション ラボラトリ(ChEM-OIL)の開所式を挙

本学と国立研究開発法人産業技術総合研究所は、材料・新概念に基づく先駆的エネルギー変換・貯蔵技術を軸として、次世代のエネルギー化学材料技術の企業への橋渡しによる早期実用化を図る連携研究拠点として、産総研・京大 エネルギー化学材料オープンイノベーションラボラトリ(ChEM-OIL)を高等研究院に設置(4月1日(土))し、5月10日(水)に、吉田キャンパス国際科学イノベーション棟において開所式を行いました。

大学の
動き

開所式では、中鉢良治 産業技術総合研究所理事長と山極壽一 総長の開会挨拶のあと、末松広行 経済産業省産業技術環境局長および藤吉尚之 文部科学省研究開発局環境エネルギー課長の来賓祝辞に続き、リチウムイオン二次電池の開発者である吉野 彰 旭化成株式会社顧問からの祝辞と諫山 滋 三井化学株式会社代表取締役専務執行役員より祝辞・特別講演がありました。

また、北岡光夫 株式会社島津製作所基盤技術所長および嶋田幹也 パナソニック株式会社主幹研究長の特別講演があり、その後、ChEM-OILの研究顧問に就任した北川 進 高等研究院物質-細胞統合システム拠点長および徐 強 ChEM-OILラボ長（産業技術総合研究所）、北川 宏 同副ラボ長および松原英一郎 同副ラボ長（ともに京都大学）からChEM-OILにおける研究方針等に関する説明がありました。

最後に、湊 長博 理事・副学長より閉会の挨拶があり、式典終了後に開催された交流会では、京都大学、産業技術総合研究所関係者のほか、産業界からも多数の出席者が、積極的な意見交換を行いました。

【参考 URL】

本学と産業技術総合研究所は、連携研究拠点「産総研・京大 エネルギー化学材料 オープンイノベーションラボラトリ」(ChEM-OIL) を設立しました。(2017年4月1日)

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyu-suishin/sankangaku-renkei/news/2017/170401_1.html



ChEM-OIL ロゴマーク

(左) 中鉢 理事長 (産総研) (右) 山極 総長 (京大)
於：京都大学吉田キャンパス国際科学イノベーション棟



関係者記念撮影

(研究推進部 (産官学連携課))

[目次に戻る ↗](#)

京大ブランド

湯浅 祥弘



大学卒業後は30年間、京都大学との関わりもなく過ごしてきましたが何故かここ4年間は何かと関わりを持ち、在学中以上に京都大学への関心や思うところが増えてきました。

2013年、松下幸之助記念財団の専務理事に就任し、理事・評議員や各事業の選考委員をお願いしました多くの京都大学の先生方にお世話になりました。欧米への留学支援を行う財団が多い中、松下幸之助記念財団では中東、イスラム圏への支援も分け隔てなく行い、アジア・アフリカ地域研究研究科の小杉 泰先生には高く評価いただきました。海外に出たがらない最近の学生についてお話しさせていただき、小杉先生からいろいろお知恵をいただきました。

2015年に華麗なる転職(?)で昭和丸筒の社長となり経営を任されています。創業93年の老舗紙加工製造の会社で、繊維、食品ラップなどの巻芯、シーリング材容器などニッチな市場で高いシェアを誇っています。

数年前より、鉄の強度5倍、重量5分の1という夢の新素材セルロースナノファイバー(CNF)の事業化に取り組んでおり、CNFの研究で世界のトップを走る京都大学生存圏研究所の矢野浩之先生には大変お世話になっています。矢野先生が旗を振る環境省の夢の自動車プロジェクトにも数少ない製造メーカーとして参画しています。

ここ数年の学外から見た京大の印象ですが、やはり京都大学との取組み、プロジェクトには安心感があります。卒業生の最良目という事もあるでしょうが一般的な見方もそうではないでしょうか。いわゆる安心の京大ブランドというものではないかと思います。

ただ今後も国内外の優秀な学生が、数ある大学の選択肢の中から「京大を目指そう」と思うためには更に強烈的な京大ブランドを作り上げていく必要があるのではないのでしょうか。

それには現役の先生方、スタッフ、学生の皆さんの活動も大切ですが、私も含めて卒業生が政治、経済、研究、文化等の分野で世界にインパクトを与えるようなものを残す事が必要だと思います。ノーベル賞受賞という研究分野での京大卒業生の顕著な活躍に匹敵するようなものが、残念ながら他の分野では見られないのではないのでしょうか。

「東京大学に次ぐ、日本でNo.2の大学」「ノーベル賞受賞者を多く輩出する自由な風土の大学」が大方の京大への見方でしょうが、これらを大きく上回る京大ブランドとはどうあるべきか？是非考えてみたいものです。

(ゆあさ よしひろ、株式会社昭和丸筒代表取締役社長 昭和58年工学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

日常の肯定

名誉教授 小野 紀明



94歳になる私の母は、現在も元気で近くに住んでいる。退職してから以前にもまして彼女と話す機会が多くなった。その話題の多くは、戦前の幼年時代から女学校を出るまでの郷里でのエピソードである。秋田県南部の小都市に和菓子屋の次女として生まれた彼女は、比較的裕福な家庭で幸福な娘時代を送ったといってもいいだろう。私の驚くのは、その記憶の確かさ、そしてなによりもそれを語るときの幸福そうな様子である。そこには家族との平和な日々はもちろんのこと、周旋屋とともに駅で列車を待つ貧しい少女や、出征を前に村人の万歳で送られていく若者などの姿も、日常的な光景として語られる。無論のこと、今日では許されない様々な差別的な言葉もそこではなげなく用いられる。こうした場面に接すると、彼女のなかに流れている時間の流れはどうなっているのかという疑問に私はとらわれる。極端に言えば、彼女にとっては父と結婚し私が生まれ、そして父が亡くなり私が退職したという戦後の時間は、すべて無化されているのである。

ところで、私の研究対象は西洋政治思想史である。とりわけ19世紀ロマン主義から20世紀ファシズムに連なるいわゆる危ない思想を扱ってきた。前者は牧歌的な永遠、後者は苛烈な破局の瞬間という決定的な相違があるとはいえ、両者はいずれも無意味な時間の流れの停止を熱望する。その結果、平凡な日常的現実を貫く道徳的、政治的秩序は無化され、ユートピアが出現する可能性が開かれるはずである。冒険を怖れ人一倍日常に固執する私が危ない思想を選択したのには、学生運動華やかなりし当時の時代の気分が大きくあずかっていたし、さらにその裏には愛情という名で美化されてきた母の権力への反抗があったことは確かである。しかし、私は今、歴史に断絶を認めるラディカルな思想よりも時間の流れの底に淡々と流れる日常的時間を慈しむ思想、例えば、敢えて時代に背を向ける柳田國男の名著『明治大正史世相篇』を貫く覚悟に魅かれる。

さて、庄野潤三は昔から私の敬愛する作家である。最近文庫になった最晩年の小説『星に願いを』を読んで、前から感じていたことではあるが改めて腑に落ちたことがある。若い頃の私は、初期の『プールサイド小景』について評される作品の雰囲気、つまり日常生活の真っ只中に居する無気味さといったものに魅力を覚えていた。日常と非日常の対比がはらむ緊張は、暗部を明示的に描くことをしない代表作『夕べの雲』でも基本的には変わっていないといえよう。そこに描かれた家長の姿に、露呈する危機の可能性に常に備えている治者の心構えを読み取ったのは評論家の江藤淳であったし、彼の卓見に感銘を受けた私も庄野文学に政治の原形を見出そうと試みた。それ故に『貝がらと海の音』から始まる淡々とした日常生活への賛歌には、飽き足りないものを感じてきた。そこでは、慣れ親しんだ生を脅かし、それ故にまた生の覚醒と現状の改善をもたらす非日常はまったくかき消され、その遠いのこだますら聴こえてこないのではないか、と。けれども『星に願いを』の読後感は違った。日常の肯定に私はなにか積極的なものを見出したのである。日常を啓蒙する必要については論をまたない。しかし、変革をもたらす危険にも自覚的でなければという老人の知恵にも私は気がついたのである。

(おの のりあき、平成27年退職 元大学院法学研究科教授 専門は政治思想史)

[目次に戻る](#)

洛 書

舞鶴の海から

益田 玲爾



職場前の舞鶴湾で毎月2回の潜水調査を続けて16年目になる。京大に就職前の2年間はハワイの研究所に勤めており、その前はスコットランドでポスドクをしていた。常夏のハワイや一瞬で夏が終わる英国から戻ると、日本の四季はいいおしく、季節ごとに移ろう魚たちについて知りたいと思った。方法は簡単で、天気の良い日に同じコースを潜り、見られた魚の種類・体長と個体数を記録している。

子供の頃に憧れた海洋冒険家のジャック・クストーは、調査船カリプソ号を駆使して世界各地の海を潜り、その様子を記録した。自ら開発したアクアラングでクストーが各地の海を探検してから、はや50年。未開の海など残されておらず、そもそも当方はカリプソ号を持たない。むしろ同じ所で潜り続けてこそわかることがあるかも、とも思った。

舞鶴湾の季節変化は明瞭である。表面水温が30℃に達する夏に魚は多く、積雪の浮かぶ冬にはほぼ魚を見ない。初夏には必ずマアジの群れが、秋にはアカカマスが現れる。長期的には南方系の魚が増えており、冷水系のサラサカジカは2008年以降いなくなった。

定期的な潜水調査は、福井県高浜町音海でも行っている。高浜原発の稼働中、ここは温排水の影響で局所的な温暖化海域となり、南方種が異常に多かった。原発が停止し、これら南方種は死滅した。原発が再稼働した際の変化も、潜水調査で明らかにしたい。こう書くとも再稼働を待ち望んでいるかと誤解されるが、個人的には逆の立場である。

2011年5月からは、気仙沼が調査フィールドに加わった。「森は海の恋人」運動で知られる畠山重篤氏のカキ養殖場周辺だ。津波の直後、「海が回復する様子を潜って記録しては」と畠山氏に誘われ、2ヶ月に1回訪れている。津波以後、クラゲ、ハゼ科の小魚、アイナメ、マナマコ、エゾアワビの順に戻ってきた。攪乱後に寿命の短い生物から順に回復する様子が見てとれる。

最近は環境DNAのプロジェクトにも関わる。海水を濾過し、抽出したDNAから生息する生物を推定する手法である。水を分析するだけで海の中を見てきたかのようなデータが上がってくる。これが完成すれば私の潜水目視調査など不要になる、と当初は思ったが、アナログ人間の出番はまだありそうだ。プロジェクトを率いる龍谷大学の近藤倫生さんと環境DNA技術を開発した神戸大学の源利文さんは、京都大学理学部の同級生とのこと。龍谷大学で舞鶴湾の魚について講演した縁が、共同研究につながった。

本学以外で講演する機会は多い。飲み屋で石を投げれば大学教員に当たるといふ京都市内と異なり、舞鶴在住の大学教員を数えるには片手で足りる。下は保育園・幼稚園から、舞鶴市内のほとんどの小学校と高校で講演をした。シニア向けの講演の機会はさらに多い。これらの聴き手には鍛えてもらった。それでも、たまに上洛しての京大生相手の講義は、緊張するし気合いも入る。舞鶴の海からのメッセージをどう伝えてやろうかと意気込むからだ。

(ますだ れいじ、フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所准教授
専門は魚類心理学、魚類生態学)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

松本 紘 元総長が名誉大英勲章 OBE (Honorary Officer of the Most Excellent Order of the British Empire) を受章

松本 紘 元総長(現 理化学研究所理事長) に対して、日英の教育・学術の交流への貢献により、エリザベス2世 英国女王より「名誉大英勲章 OBE (Honorary Officer of the Most Excellent Order of the British Empire)」が授与され、2017年2月23日の駐日英国大使館での叙勲式において、ポール・マデン 駐日英国大使より勲章が伝達されました。

同勲章は1917年にジョージ5世 英国国王によって創設された、芸術、文化、科学、福祉等についての文民の功績を表彰するもので、英国国王より授与されます。

松本元総長は、2008年10月から2014年9月まで本学総長を務め、英国内の大学との間での単位互換を推進し、また、2015年4月から理化学研究所理事長として英国ラザフォードアップルトン研究所(RAL)にあるミュオン施設内の理化学研究所支所での活動をはじめとした両国間の共同研究を推進するなど、さまざまな分野での日英の教育・学術に関する交流への貢献が高く評価されました。



左からマデン駐日英国大使、
松本元総長



叙勲式の様子

(総務部(広報課))

[目次に戻る ↗](#)

話題

宇治おうばくプラザで「第8回たそがれ花見コンサート」を開催

宇治地区では4月7日(金)、宇治おうばくプラザきはだホールにおいて宇治在住の濱村 茂 氏、前山奈美 氏と、東宇治中学校吹奏楽部による「第8回たそがれ花見コンサート」を開催しました。

このコンサートは、おうばくプラザの広報と地域へのサービスの一環として毎年春に開催しているもので、連携協定を締結している宇治市より山本 正 市長も来場され、ご挨拶いただきました。

濱村氏のフルート、前山氏のピアノでの春の曲を中心とした演奏と随所にトークを交えた親しみやすい内容で、来場者は熱心に耳を傾けていました。

また、地域交流の一環として出演いただいた東宇治中学校吹奏楽部の演奏も大変好評でした。

当日は、あいにくの雨模様でしたが約280名の方が来場され、地域の春の恒例行事として、今後も継続を期待する声が多くありました。



宇治地区世話部局長 岸本泰明 山本宇治市長による挨拶
エネルギー理工学研究所長による挨拶



濱村氏(右)、前山氏(左)による演奏



東宇治中学校吹奏楽部の演奏

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

宇治キャンパスで「平成29年度新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催

宇治キャンパスでは、4月17日(月)宇治おうばくプラザ きはだホールにおいて、「平成29年度 新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催しました。

この講習は、安全に職務や研究を行うために必要な安全衛生に関する知識を修得することを目的として、新たに宇治キャンパスで実習・研究を実施する学部4回生、大学院生及び新規配

話題

属の教職員等を対象に毎年実施しているものです。

今年度宇治事業場総括安全衛生管理者に就任した岸本泰明 エネルギー理工学研究所長による開会の挨拶に始まり、『宇治事業場の安全衛生』、『衛生管理者による巡視とチェックリスト』、『物理実験および計算機関係』、『日々の安全と危険予知等について』、『喫煙問題』、『健康管理・応急手当』、『生物実験および放射線取扱』、『化学物質管理および実験系廃棄物管理』、『実験排水』に関する説明があり、計196名（学生129名、教職員67名）の受講者は熱心に耳を傾けていました。



宇治事業場総括安全衛生管理者 岸本所長による開会の挨拶
会場の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

第12回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催

人文科学研究所は3月18日(土)、東京の一橋講堂中会議場において、第12回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催しました。

本セミナーの目的は、人文科学研究所が80年余にわたって蓄積してきた中国学研究の成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらうことです。

セミナーは稲葉 穰 人文科学研究所東アジア人文情報学研究センター長の開会挨拶に始まり、「漢籍の遙かな旅路—出版・流通・収蔵の諸相」をテーマに、宮 紀子 人文科学研究所助教「モンゴル時代の書物の道」、中砂明德 文学研究



稲葉センター長



宮助教



中砂教授



矢木教授

話題

科教授「明末の宣教師が出版した漢籍とキリシタン版」、矢木 毅 人文科学研究所教授「漢籍購入の旅—朝鮮後期知識人たちの中国旅行記をひもとく」の3講演を行いました。終了後のアンケートでは、「モンゴルというのは盲点だったというかよく知らずにいたことがわかりました」、「きりしたん版と明末の出版が線でつながるのは目からウロコでした」といった感想が寄せられるなど、参加者（167名）にとって有意義な機会となりました。



セミナーの様子

(人文科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

総合生存学館（思修館）学生企画「産学連携バトル！ in Kyoto」を開催

3月11日（土）、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールにて、思修館およびデザイン学の学生が企画した産学連携ワークショップ「産学連携バトル！ in Kyoto」を開催し、全国から26のリーディングプログラムの学生や教職員ならびに10の企業から総勢約120名が参加し、大いに盛り上がりしました。

本ワークショップは、博士課程リーディングプログラムにおける産業界等への広報活動の一環として、本学大学院総合生存学館（思修館）とデザイン学大学院連携プログラ



開会挨拶 北野理事・副学長

ムの学生が企画し、一般社団法人 産学協働イノベーション人材育成協議会（C-ENGINE）に共催いただき、文部科学省による補助金の支援のもと開催しました。このワークショップでは、近年複雑化した社会問題の解決には、個々の専門性を伸ばし経験と統合することが産官学いずれの立場でも必要であることから、俯瞰的な視野と専門性を持つ学生と、社会的実践の場を牽引する企業とがタッグを組んで、新感覚のブレストバトルという手法を使って新たな解決策を見出すことを目標に掲げ、実施しました。今回、社会問題として、「女性の活躍」「知能のインフレ」「超高齢社会の未来」の3つを選びました。

まず、北野正雄 理事・副学長（思修館リーディングプログラム代表者およびC-ENGINE代表理事）による開会挨拶に始まり、セッション1として、3つの基調講演がありました。講演1

話題



講演 1 河合江理子教授



講演 2 大場紀章主席研究員



講演 3 下野雅承最高顧問

は河合江理子 総合生存学館教授による「女性の活躍」，講演2は大場紀章 一般社団法人 日本データサイエンス研究所主席研究員による「『知能』のインフレと社会・ヒトの変化」，講演3は下野雅承 日本アイ・ビー・エム株式会社最高顧問による「超高齢社会におけるシルバー・イノベーション」であり，それぞれのテーマを深掘りする内容でした。

セッション2として，京弁当を食べながら学生と企業との交流会がありました。まず，参加された各企業から1分間の企業紹介と企業の特徴に基づいたクイズが出され，その答えはそれぞれの企業のブースに行けばわかる仕組みとなっており，工夫を凝らした出題がありました。その後，学生たちは関心のある企業のブースに行って真剣な面持ちで企業の方の話を聴き，今後博士課程の学生と企業とのマッチングにつながる取り組みとなりました。



企業ブースにおいて懇談する学生たち

午後から行われたセッション3のワークショップでは，リーディングプログラムの学生と産業界の方々でチームを組み，3つのテーマに係る諸問題・課題の解決策をチームで競う「プレストバトル」の手法を導入しました。「プレストバトル」とは，「ブレインストーミング×バトル」の略で，時間制約を課して参加者の自由なアイデアを集め，チーム対抗で意見を戦わせる新感覚ディスカッションです。全員の投票のうえ，最高の解決策として，「幸せに生きるためのアクティブエイジング」が選ばれました。



プレストバトル議論の様子



プレストバトル発表の様子

話題

基調講演で得た基本的な知識に基づき、自由な発想を生み出す学生と社会的な知恵と経験を持つ産業界の方が一つのチームを組むことで、複雑な社会問題の中から正しく課題を抽出し、その解決策を探る実体験ができる貴重な機会となりました。あちらこちらで意見を戦わせ、時には意表をつくアイデアが出るなど、会場は笑い熱気に包まれ、真剣な表情の中にもその議論を楽しむ様子が伺えました。

最後に、川井秀一 総合生存学館長（思修館リーディングプログラムコーディネーター）から閉会挨拶があり、盛況のうちに閉幕しました。



優勝したチーム



閉会挨拶 川井秀一学館長

（大学院総合生存学館（思修館））

[目次に戻る](#)

高等教育研究開発推進センター 第23回大学教育研究フォーラムを開催

3月19日（日）～20日（月）、吉田南総合館・1号館および百周年時計台記念館において、第23回大学教育研究フォーラムを開催しました。

初日の「アセスメント・イン・アクションー評価の新しい形ー」と題されたシンポジウムでは、北野正雄 理事・副学長の挨拶に続き、土井隆雄 宇宙総合学研究ユニット特定教授、平田オリザ 東京藝術大学COI研究推進機構特任教授、錦織 宏 医学教育推進センター准教授が話題提供を行い、最後にパネルディスカッションを行いました。シンポジウムの前に開催されたMOSTフェロー発表会「モストDEデートー異分野コラボレーションによる共同的授業実践の創発ー」では、異分野コラボレーションによる共同的授業を実践された事例が紹介されました。

また、初日の午前中には、新井紀子 国立情報学研究所社会共有知研究センター長による特別講演および、深堀聰子 国立教育政策研究所高等教育研究部長、浅野茂 山形大学学術研究院教授による学術セミナーを開催しました。



シンポジウムの様子

話題

個人研究発表では、ポスター発表80件、口頭発表115件の大学教育改善の実践研究に関する発表が計195件ありました。フォーラム最後には参加者企画セッション14件が行われ、大学教育の最新の知見と実践に関して、各会場で活発な討論が交わされました。

この大学教育研究フォーラムには、2日間で学内外の大学関係者を主として計807名の参加者があり、盛会のうちに終了しました。



ポスター発表会場



参加者企画セッション

(高等教育研究開発推進センター)

[目次に戻る](#)

新入生への心肺蘇生・AED 講習会 1万人を突破！

4月4日(火)から4月6日(木)に学部新入生および大学院生に対して行われたガイダンスの中で、平成27年度から全学部新入生に、平成28年度より大学院新入生に対して40分間の心肺蘇生・AED講習会を実施しています。この講習会を始めてから今年で3年目、この4月で本学では学部および大学院生合計1万人もの学生が、胸骨圧迫やAEDの使い方を学んだことになります。

講習会では、新入生たちは、偶然隣に座った同級生と二人一組になり、心肺蘇生の中でも特に重要な胸骨圧迫とAEDの使い方を学ぶためのトレーニングキット「あっぱくん®」を使って実習を行いました。講習会には多数の教員が参加し、新入生に声をかけながら、心肺蘇生のトレーニングを楽しく行いました。

入学時に実施しているこの講習会の目的は、心肺蘇生のスキルを獲得することだけではありません。京都大学に入学してきた学生それぞれに、「いのち」の尊さを考えてほしいと願っています。それに加えて、困っている人を見かけたら、自ら進んで助けられる心優しい人間になり京都大学を巣立っていくことを、我々教職員は心から願い、この「いのち」の教育を入学ガイダンスで行っています。



講習会で胸骨圧迫を行っている様子

この講習会は、国際高等教育院の統括のもと、医学部人間健康科学系専攻、環境安全保健機構、医学部附属病院救急部、同病院総合臨床教育・研修センターの教員が共同で運営しました。

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、樋口隆昌 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。



樋口 隆昌 名誉教授

樋口隆昌先生は、平成29年2月23日逝去されました。享年89歳。先生は、昭和25年3月名古屋大学理学部生物学科を卒業、同年3月岐阜大学岐阜農林専門学校助手に採用され、同年同月岐阜大学農学部助手に配置換え、昭和28年10月同講師、昭和35年1月同助教授、昭和42年4月同教授に昇任されました。次いで、昭和43年4月京都大学木材研究所（現生存圏研究所）教授に配置換えされ、リグニン化学研究部門を担当されました。この間、昭和34年に農学博士の学位を東京大学から授与された後、昭和35年から2年間カナダ国立平原地方研究所客員研究員として留学され、次いで、昭和38年から1年間グルノーブル大学理学部客員教授を務められました。昭和53年から6年間および昭和63年から3年間本学木材研究所長および本学評議員を歴任され、本学の運営に尽力されました。平成3年3月停年退官され、同年本学名誉教授の称号を授与されました。その後、平成3年4月より3年間日本大学農獣医学部教授を務められました。

先生は長年に亘り木質化学の教育と研究に携わられ、リグニンの生合成と生分解およびリグニンの化学構造に関する多くの優れた業績を残されました。先生の業績は内外で高く評価され、昭和60年に日本農学賞、昭和62年米国化学会アンセルムペイエン賞、昭和62年グルノーブル大学名誉博士学位、昭和63年国際木材科学アカデミー賞、平成2年紫綬褒章、平成4年藤原賞、平成12年勲二等瑞宝章、平成13年に日本学士院賞を授与されました。また、平成2年から3年間国際木材科学アカデミー会長、平成3年より米国科学アカデミーの海外会員を歴任されるなど、国内外のリグノセルロースの基礎生化学的研究分野の学術の進展に多大な貢献をされました。

（生存圏研究所）

[目次に戻る](#)